

香港の小学校における「学校に基礎を置くカリキュラム開発」の特徴に関する研究

—課程主任の役割に着目して—

野 澤 有 希*

(平成29年8月25日受付；平成29年11月15日受理)

要 旨

本研究の目的は、香港のカリキュラム改革の中で、「学校に基礎を置くカリキュラム開発」(School-Based Curriculum Development, 以下香港語:「校本課程開発」と略す)の特徴を考察し、とくに、香港教育局が校本課程開発の政策を各学校に浸透させるために、2002年から小学校で「課程統籌主任」(以下課程主任と略す)というミドルリーダー専門職を設置した経緯と役割を解明することである。

香港は新しい教育理念を実現するために、校本課程開発すなわちSBCDを推進することに力をいれた。本稿では、香港の校本課程開発政策の特徴を考察したうえで、課程主任という職を設置した経緯と役割を明らかにした。ここでは、結論として以下の三点にまとめる。第一に、香港教育局は知識偏重から「学び方を学ぶ」という教育理念への転換を実現するために、全力で校本課程開発を推進してきた。教育局は、カリキュラム改革の原動力が各学校の校本課程開発の実践にあることを強調し、香港のカリキュラム改革の短期・中期・長期発展計画を立てた。第二に、校本課程開発を支援するために多額の補助金を投入し、基金を設立したうえで、組織面、制度面で様々な支援制度を設けて、校本課程開発を大いに推し進めた。第三に、本稿では、公文書で記して内容を考察したうえで、香港のA小学校の校長と校内カリキュラム検討会のメンバーに対するインタビュー内容の分析を通じて、課程主任の役割を明らかにした。

KEY WORDS

School-Based Curriculum Development 校本課程開発 curriculum coordinators カリキュラムコーディネーター
Hong Kong curriculum reforms 香港カリキュラム改革

1. はじめに

本研究の目的は、香港のカリキュラム改革の中で、「学校に基礎を置くカリキュラム開発」(School-Based Curriculum Development, 以下香港語:「校本課程開発」と略す)の特徴を考察し、とくに、香港教育局が校本課程開発の政策を各学校に浸透させるために、2002年から小学校で「課程統籌主任」(以下、課程主任と略す)というミドルリーダー専門職を設置した経緯と役割を解明することである。

日本での児童生徒の学力低下が指摘されている今日、「学校に基礎を置くカリキュラム開発」すなわちSBCDの理論と方法は、ある程度蓄積されているが、効果が十分に検証されたとは言えない。日本でカリキュラム開発に注目し始めたのは、1974年3月に東京で開催されたOECD国際セミナーでのSBCDが提起されてからである⁽¹⁾。2008年に「総合的な学習の時間」が縮減され、また、次期学習指導要領への移行措置で、その一部を外国語活動に振り替え可能とした。日本ではSBCDが活発に行われているとはいえない。一方、香港では1980年代から校本課程開発の政策を始め、2000年代からは本格的にカリキュラムの裁量権を各学校に委譲した。よって、校本課程開発を積極的に推進してきた香港のカリキュラム改革を研究する意義がある。

1997年にイギリスの植民地から中国に返還された香港は、「一国二制度」によって大陸とは教育制度や政策が異なる。2000年以来、香港はOECDのPISA調査で、三分野でほぼ三位以内をキープする好成績を収めてきた⁽²⁾。その大きな要因は、香港が教育目標、教育理念、教育内容、方法、評価などの各方面でカリキュラム改革を行ってきたからである。特に、今回のカリキュラム改革の背景には、香港が、ロンドン、ニューヨークと並ぶ世界三大金融センターの一角としての地位を確立しつつあるという事実、そして、その地位を維持し続けるためには、児童生徒の思考力、創造力、探究力を育成し、チャレンジ精神と創造性を兼ね備えたグローバル人材の育成が喫緊の課題であるという認識がある。

『香港教育制度改革建議』(2000年)の中では、これからの教育改革の主要な内容が明示されている。それは、

*学校教育学系

1).知識偏重から「学び方を学ぶ」へ、2).知識重視から全人教育へ、3).固有な教科の枠からカリキュラムの統合へ、4).テキスト主導の学習から教材の多様化へ、5).社会全体が教育を支援し、学習は教室から教室外へ、6).硬直した時間割から弾力的な時間割へ、7).早い段階での教育の選抜・配分機能から、児童生徒の探究力、潜在能力の重視へである⁽³⁾。これらの教育政策が、児童生徒の潜在的な能力を引き出し、多様な資質・能力を育成するという全人教育の目標を達成するためである。その効果は、OECDにも「香港で10年も経たないうちに、小学校を卒業した生徒が中学校で活動的な学習を行うようになり、読解力の一連の国際比較においても、生徒の成績に改善が見られるようになった。例えば、国際教育到達度評価学会（IEA）の国際読解力調査（Progress in International Reading Literacy Study）では、香港の小学生の読解力の国際ランキングで2001年の14位から2006年の2位に順位が上がった」⁽⁴⁾と評価された。さらに、2011年のPIRLS調査では1位を獲得した。このように、香港はすさまじいスピードでカリキュラム改革を推進し、確実に児童生徒の資質・能力を高めてきている。

香港教育局は、どのように知識偏重から「学び方を学ぶ」という教育理念への転換を実現できたのだろうか。当局は新しい教育理念を実現するために、校本課程開発すなわちSBCDを推進することに力をいれた。香港の学校では、新しい教育内容と教材の開発など、現行のカリキュラムの各学習領域の中で、あるいは領域を融合する校本課程開発が盛んに見られる。このような校本課程開発を重視する動きが、日本のSBCDの不発とは対照的に、めざましく展開されているのである。

香港教育局が校本課程開発の実施政策を初めて打ち出したのは、1988年9月に「校本課程設計計画」を立てたからである。政府は補助金を出し、教材、新しい単元の開発など、学校で校本課程開発を積極的に推進することを奨励した。この計画は、校本課程開発に興味を持つ経験豊かな教師が積極的にカリキュラム開発のプロセスに参加し、本格的な校本課程開発を実行することを目標に掲げていた。しかしながら、当時の校本課程開発の政策はカリキュラムの裁量権を学校現場、教師に委譲していなかったため、中央レベルのカリキュラムに基づく教材開発にとどまっていた⁽⁵⁾。その後、政府は引き続き各学校での校本課程開発を奨励し、支援するために、1998年に50億香港ドル（約6.45億ドル）の補助金で「香港優質教育基金」を設立した。2009年6月の教育局の報告によると、その後も36.2億香港ドル（約4.67億ドル）の補助金が投入され、7400の教育計画を補助した⁽⁶⁾。

このように、2001年のカリキュラム改革から、香港の学校では、政府の甚大な支援のもとで、本格的に校本課程開発が繰り返されている。香港の校本課程開発政策がどのように各学校に浸透しているかを解明するために、筆者は2002年から小学校に「課程主任」というミドルリーダー専門職が設置された経緯に着目し、校本課程開発政策の特徴を考察したうえで、課程主任の役割を明らかにしたい。

2. 校本課程開発を推進するための政策

2-1. 校本課程開発の目的と政策内容

2001年の政府公文書『基礎教育課程指引-各尽所能・發揮所長』（日本の学習指導要領と同様）の中では、「各学校の教師と児童生徒の特色が違い、学校の教育活動の進み具合と要因が違うので、画一的なカリキュラム政策は通用しない」と強調し、「各学校の活動研究、教師の専門性の向上は校本課程開発と緊密な関係をもつ」⁽⁷⁾と記されている。

具体的には、校本課程開発の目的は「1.学校の校本課程開発は児童生徒のニーズと興味に合わせることができる。2.教師のカリキュラム開発の潜在能力と専門知識の発展を促進することができ、規定された中央レベルのカリキュラムの束縛から解放できる。3.校長がリードし、中央レベルのカリキュラムを学校に適合できるように調整できる。4.社会変化に応じ、実生活で必要される知識と技能を習得することができる。」⁽⁸⁾であった。

また、教育課程発展議会（日本の中央教育審議会に当たる）が、2001年に『学び方を学ぶ-教育課程発展方向』報告書の中で、カリキュラム改革の原動力は各学校の校本課程開発の実践にあると強調し、校本課程開発を通じて、教師の専門性向上、児童生徒の興味・関心を引き出すことを目的とし、今後十年間の香港のカリキュラム発展の方向性と計画を明確に打ち出した。

表1に示すように、香港教育局のカリキュラム改革は校本課程開発を中心に展開されていることが明らかになった。教育局が校本課程開発に資源と支援を提供し、校長と教師の研修プログラムの充実化に向けて取り組んだ。また、大学との連携を強化し、校本課程開発で優れた成果を上げた学校を「種学校」と指定し、他の学校への指導と支援の形で、成功経験を広げている。さらに、中期発展期に入ってから、成功経験をまとめて、評価と改善を検討してから具体的に校本課程開発の方策を示している。2011年以降の長期安定期に入ってから、社会と児童のニーズを重視

して、社会団体、家庭との連携を強化し、カリキュラム開発を持続的に推進することを目指している。学校側の最初の五年計画では、校本課程開発を実施し、教授・学習の効果を高めている。四つの重点教育項目（徳育と公民教育、読書から学習、課題解決学習、IT活用学習）を通じて、批判的思考力、創造力、コミュニケーション能力、「学び方を学ぶ」ことを習得させている。中期発展期に、短期発展期の成果と中央カリキュラムの枠組みに基づき、学校発展計画の次の段階に進めて、校本課程開発を促進し、教授・学習の方策を改善する。長期安定期に、教授・学習の有効な方策を活用し、児童生徒の全人教育、生涯学習を促す。特に、児童生徒のニーズに応じた校本課程開発を進展させることが強調されている。このように、政府側は段階的に方策を示しながら、校本課程開発を推進してきた。その方策として、学校側への支援と資源を提供し、大学教授などの外部の専門家と団体との連携を重視している。また、「種学校」を指定し、成功経験を広げている。安定成長期に入ってから、持続的に各学校が児童生徒のニーズに応じて校本課程開発を行うことが必須となった。

表1. 香港のカリキュラム改革の短期・中期・長期発展計画

短期発展 (2001～2005)	<p>○政府</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校側に資源と支援を提供する。例えば：教育課程指針、校長及び教師の研修プログラム、校本課程開発支援等。（2002年から、すべての学習領域及び科目のカリキュラム指針が告示される。） ・学校と大学との連携を強化し、「種計画」（優秀な先進校を「種学校」として指定する）を推進し、成功した経験を活かして他の学校を支援する。 ・短期発展段階が終了する際、全体の進み具合と成功経験を検討し、まとめる。 <p>○学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の背景と状況が違うので、各学校が自らの状況と条件に応じて、校本課程開発の発展計画を立てる。 ・基本的に『学び方を学ぶ：教育課程発展方向』の28-58頁の内容と方策に基づき、教授・学習の効果を挙げる。四つの重点教育項目（徳育と公民教育、読書から学習、課題解決学習、IT活用学習）を通じて、批判的思考力、創造力、コミュニケーション能力を高め、学び方を学ぶ。
中期発展 (2006～2010)	<p>○政府</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短期発展の成功経験をまとめ、学校に校本課程開発、教授・学習の方策を示す。 ・2005年の検討結果に基づき、関連ある計画と実施を改善する。 <p>○学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短期発展の成果と中央カリキュラムに基づき、学校の発展計画の次の段階に進めて、校本課程開発を促進し、教授・学習の方策を改善する。
長期発展 (2011以後)	<p>○政府</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会と児童生徒のニーズに基づき、カリキュラム開発を持続的に改善する。 ・学校が家庭、教育関係者、及び社会団体と連携し、成功経験を蓄積し、学校教育の質を高める。 <p>○学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授・学習の有効な方策を活用し、児童生徒の全人教育、生涯学習を促す。 ・中央カリキュラムに基づき、児童生徒のニーズに応じた校本課程開発を進展させる。

（教育課程発展議会（2001）『学び方を学ぶ：教育課程発展方向』により筆者が作成⁹⁾）

このカリキュラム改革の計画から、2001年以降、校本課程開発は各学校が必ず取り組まなければならない教育活動であることが分かる。特に、長期安定期に入ってから児童生徒のニーズ、興味・関心、発達段階、能力に応じて、校本課程開発を行うことが重要視されている。この政策は学校の資源と強みを活かし、教師の専門性向上と自主参加を図りながら、専門的な知識と能力を生かし、新しいカリキュラムを編成して、児童生徒の興味・関心を引き起こすことを目的としている。校本課程開発の目的は上述したものだけではなく、図1のように、校本課程発展は教師の専門性向上（専門知識、教職に対する態度と情熱、自主性）、学校組織機能の活性化（カリキュラムリーダーシップの向上、教師の協働性を促進し、学校の特色を生かす）と不可分の関係を持っている。三者の相互作用の下で、「学び方を学ぶ」という教育理念を実現することを図っている。

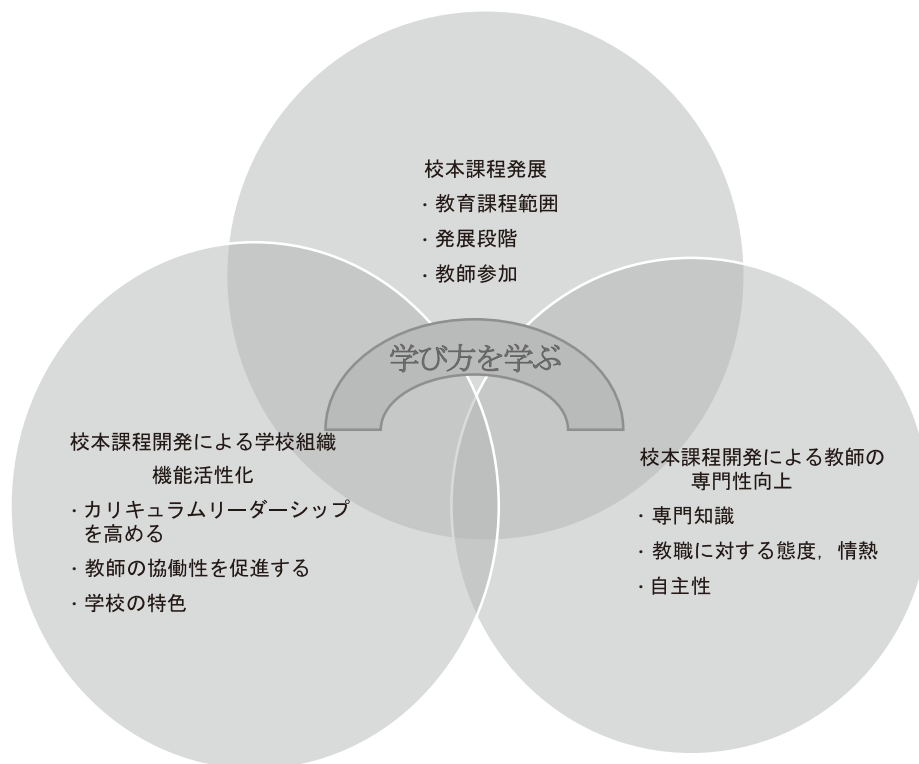


図1. 校本課程開発による「学び方を学ぶ」ことへの促進図⁽¹⁰⁾

香港の校本課程開発の成功理由は、政府が校本課程開発のために、資源、空間と時間、及び自主性を与えたことである。教師が中央集権のカリキュラムから解放され、カリキュラム開発の主体となって、積極的に参加するようになった。また、カリキュラム開発の専門性も高められた。校本課程開発は児童生徒の「学び方を学ぶ」という学びの質を変え、真の学びの姿を追求する有効な方策である。香港都市大学の「2003年学校カリキュラム改革及び各学習領域の実施状況に関する調査」によると、「70%以上の小学校の校長と50%以上の中学校の校長が、児童生徒の主要な資質・能力が育成された、特に、コミュニケーション能力、思考力、学習の動機づけ、創造性、責任感等の資質・能力の育成が大いに改善された。また、60%以上の校長と教師がカリキュラム改革の中で、専門性が向上した⁽¹¹⁾」と答えた。

2-2. 教育局の校本課程開発の支援政策

校本課程開発の支援政策として、まず、教育局で校本支援行政組織を設けて、校本課程開発を大いに発展させた。例えば、1992年に教育署（現教育局）では「教育課程発展処」（現校本支援処）を設立し、校本課程の発展に力を入れた。その後、校本課程開発を支援する行政組織が細分化され、「小学校校本課程発展組」と「中学校校本課程発展組」が設立されて、20年あまりが経った⁽¹²⁾。教育局は学校現場への専門的な校本課程開発の指導という支援制度を設けて、校外から定期的に専門家と教育局の校本課程発展処の指導者を派遣している。支援の重点として、①学校全体の校本課程開発の計画：カリキュラムのバランスを重視する校本課程開発を発展させ、カリキュラムの縦の系統性と横の融合を実現する。異学年間の交流を深め、カリキュラムのアーティキュレーションを実現する。②教授・学習の効果を高め、多様性を重視し、方策を探る。中国語を学習する環境を整え、児童生徒の多様な学習経験を促す。③評価の支援を行う。教授・学習の検証データを集め、児童生徒の強みと弱みを診断し、教授・学習活動にフィードバックする。④カリキュラムリーダーの専門性向上を図る。カリキュラム改善部門の継続的な発展を促す。

香港教育局は、主要な学習領域で成果を挙げた学校を「専門性発展学校」を指定し、他の学校への支援と指導を行うためにリーダーシップを発揮させている。例えば、他の学校の教師と共同で教員研修を行う。また、共同授業計画を作成し、授業参観をし、授業評価を行う。さらに、インターネットを通じて、専門性発展学校は支援ネットワークを立ち上げ、他の学校の教師への支援を日常化している。その他、「学校支援教師ペア計画」を推進している。主要な学習領域での優秀な教師（中国大陸の優秀教師を含む）を他の地域から一時期、出前授業あるいは雇用形式で学校

支援を行う⁽¹³⁾。

2-3. 校本課程開発のための弾力的な時間割

「改革前は教師が中央カリキュラムの内容をそのまま教える教育の技術員であった。中央集権的なカリキュラム形態はもはや時代に適応できない。学校に多くの自主権と裁量権を委譲する校本課程開発が重要である」⁽¹⁴⁾。2001年以降、香港は教育政策の面で校本課程開発を重点的に発展させて、新しい校本課程開発の学校文化を醸成することを促している。このことは、授業時間数とスコープからも見られる。

表2に示したように、香港の小学校は小1～小3、小4～小6という二つの学習段階に分けられ、各段階の最低授業時数しか明示されていない。各領域で校本課程開発を活発に行っている上に、弾力的な時間を設けている。弾力的な時間においては、①道徳と公民教育、生徒指導、領域横断的な価値観教育、②読書から学習、③クラス会などでの教科横断的な価値観教育、④各領域や領域横断の補習や才能教育、⑤学習経験を広げ、「全方位学習 (life-wide learning)」を促進するという教育活動に取り組むことを記している⁽¹⁵⁾。

表2. 香港の小学校の領域と授業時数⁽¹⁶⁾

学習領域／科目	小1～小3 (第1学習段階) 小4～小6 (第2学習段階)
中国語、北京語	594～713時間 (25～30%)
英語	404～499時間 (17%～21%)
数学	285～356時間 (12～15%)
常識科 (科学, 科学技術, 個人・社会と人文)	285～356時間 (12～15%)
芸術	238～356時間 (10～15%)
体育	119～190時間 (5～8%)
三年間の授業時間数下限	1925時間 (約81%)
弾力的な時間	19% (三年で約451時間)
三年間の総授業時間数	2376時間 (762時間×3) (100%)

※各三年間の学習段階の授業時間数である。小学校各学年の就学日数は190日である。

香港は帰還後、教科の壁を打破し、校本課程開発を促進するために、八つの領域を新設した(1993年～2001年までは、コアカリキュラムと教科を中心とする枠組みであった)。その意図は、児童生徒が習得しなければならない領域の重要な知識と関連する概念に基づき、学習環境を提供し、適切な教授・学習の方策を用いて、主要な資質・能力(1.協働性, 2.コミュニケーション能力, 3.創造力, 4.批判的思考力, 5.情報技術の応用能力, 6.運算能力, 7.問題解決能力, 8.自己管理能力, 9.主体的な学び, 探究力)と正しい態度・価値観(責任感, 他人を尊重する, 強さ, ナショナル・アイデンティティ, 思いやりと愛, 誠実さ, 使命感など)を育成し、知識の再構成を促すためである。八つの領域は中国語, 英語, 数学, 科学, 科学技術, 個人・社会と人文, 芸術, 体育教育である。現在、香港では各領域の中で、あるいは領域横断の形で校本課程開発を促進している。例えば、科学, 科学技術, 個人社会と人文を統合して、小学校では「常識科」を新設して、カリキュラムの統合を促している。校本課程開発は統合カリキュラムの「常識科」で盛んに行うだけでなく、他の領域でも活発に実施している。関の調査によれば、香港では小学校の国語における校本課程開発は98.2%に達していて、成功した要因としては「児童生徒の興味関心に基づいて、資源を有効に利用し、共同に授業案作りと授業準備、効果的な教育方法を利用している」を述べた⁽¹⁷⁾。このように、香港の教育課程改革は、ただ教育内容・方法, 教材, 授業時間数の配分という中央レベルのカリキュラムを弾力化させるだけでなく、校本課程開発の支援体制の充実, 教師の専門性向上と学校組織機能の活性化を同時に図りながら、各学校で校本課程開発の学校文化を醸成して、成し遂げられたのである。つまり、香港の教育課程改革が成功した理由は、各学校で活発な校本課程開発を通じてカリキュラム改革の理念を浸透したからである。その旗振り役として大きな役割を果たしているのが「課程主任」である。

3. 課程主任の配置の経緯と役割

3-1. 課程主任を配置する経緯

教師がカリキュラム改革の最も核心的な担い手である。90年代中期までは、政府あるいは教育関連機関（教育統籌局、課程發展処、教育統籌委員会、課程發展委員会）などがカリキュラム改革を主導してきた。このようなトップダウン型の改革方式は、各学校、各教室でのカリキュラム実施段階で失敗する。それは、教師を指示に従うだけの技術員と見なし、信頼できるカリキュラム開発の専門家として評価されないからである⁽¹⁸⁾。教師がカリキュラム改革の理念と政策に賛同しなければ、教室の変革をもたらすことはできない。「教師がカリキュラムの方向性に反対する場合には、冷たい目線で観察するだけでカリキュラム改革に参加しないことになる。教師の意識と役割を変えない限り、カリキュラム改革の新しい理念と方向性の転換は実現できない。教師のカリキュラム改革の認識度は固定不変ではなく、改革に対する理解度を高めて、新しいカリキュラムを実践して、成果を味わいながら絶えず変化するものである」⁽¹⁹⁾。

香港政府は、各学校でカリキュラム変革をもたらすために、2001年に各小学校で課程主任という職を設置することを告示した。董は2001年の施政報告で「小学校で順調にカリキュラム開発の計画と方策を立てるために、各小学校で5年間課程主任を設置し、学校でのカリキュラム開発等を担当する」、また「2002年から、我々は3年間で順序を立てながら、全ての公立小学校に課程主任を設置する。2005年の中期發展期に入ってから、この職を続けて設置する必要性を検討する。教育署（現在の教育局）はできるだけ早く課程主任のための研修プログラムを充実させ、専門性向上を図る」⁽²⁰⁾。その後、香港教育局は初任者の課程主任に年間約130時間の必修と選択の研修プログラムを開設した。研修後、短期研修プログラム、現職研修、学習サークル、研修セミナーとワークショップ、校内研修、学校間の交流、学校發展日を通じて専門性の向上を図っている。研修プログラムを充実させることによって、課程主任にカリキュラムの理論と実践の両面でカリキュラムリーダーの能力を育成している。

香港教育局は、2006年に教師の仕事を軽減する政策を公表した。その中には課程主任を常設職へ変更する内容が盛り込まれており、「5年の試行期を経て2007年から課程主任という職を、常設職に変更する」⁽²¹⁾と記されている。この政策は、教師の仕事の負担を軽減する政策の一環として位置付けられている。また、課程主任を設置した以来、学校に歓迎され、カリキュラム改革の推進役としての成果も現れている。「課程主任を設置している学校では、教師の持続的な専門性向上が見られたので、カリキュラム開発が明確な目標を持ち、教師の間には協働文化が生まれ、授業の質も高まった。同時に、課程主任が学習サークルを結成し、具体的な問題を解決するために尽力し、カリキュラム開発の専門性向上も達成できた」⁽²²⁾。

香港の学校のカリキュラムの意思決定は、「一般的には校長をはじめ、副校長、および課程主任によって行われる。そして会議で決定した事項は科目主任と教師によって実行される。校長らは現在のカリキュラム改革の方向性に鑑み、地域の意見を集めて、学校がどのように児童生徒を育てるのかの方針を決める。また、校長らが実行性を持つ計画を策定してから、全体教師と会議で討論し、意見を収集する」⁽²³⁾。課程主任は中央カリキュラムの政策と方針をどのように学校で具体化するか、どのように校長に協力して、学校全体のカリキュラム計画を策定するかなどのカリキュラム開発のあらゆる場面で、リーダーシップを発揮しなければならない。同時に、教師の専門性と協働性を重視しながら、授業の質を高める責任も持っている。課程主任は香港の校本課程開発の政策と理念を各学校に浸透させた重要な専門職である。

3-2. 学校の校本課程開発における課程主任の役割

「学校には有能な管理職が必要であり、教授法とカリキュラム開発に詳しいリーダーが必要である。リーダーはカリキュラム開発、教授法の変革、および校本課程開発の研修活動を全体的に計画し、未来志向の有効な方策を考え出すことが重要である」⁽²⁴⁾。課程主任の職務に関しては、1).校長に協力し、カリキュラム改革の理念と方針に従い、中央カリキュラム、学校ビジョン、児童生徒の学習ニーズに応じて、バランスを取りながら、学校全体のカリキュラム計画を策定する。また、カリキュラム改革のリーダーシップを取る。2).校長を助け、学校の評価活動を計画、実施、推進する。3).教師の専門性向上の研修、共同授業準備、人的・物的資源の活用などの活動を通して、教師の教育内容と方法、評価活動の改善を促す。4).校内で教師間の交流と協働文化を醸成する。他の学校と交流し、校本課程開発の経験を学ぶ。5).一部の授業を分担し、日常の授業とカリキュラム開発の実状を把握する（校内一人の教師の平均担当授業時間数の50%）⁽²⁵⁾。

このように、香港教育局は積極的にカリキュラム改革を推進するために、課程主任の授業負担を軽減し、日常の学校の現状を把握させつつ、校本課程開発に専念させている。その目的は、カリキュラム改革の理念と方針を各学校に

浸透させることである。つまり、カリキュラム政策を学校のカリキュラム実施レベルまで落とし込み、児童生徒のニーズに応じてバランスのよいカリキュラムを開発することである。課程主任がカリキュラム開発の理論と方法を習得して、校長に協力して、専門家の立場でリーダーシップを発揮している。同時に、学校の校本課程開発の協働文化を醸成するために、教師の専門性を向上させ、各学習領域で校本課程開発の発展部会を設けて、全校の教師の参加を促している。

また、「教師たちは、校長がどのように課程主任にカリキュラム改革の決意と態度をみせるかを観察している。また、どのように主任にカリキュラム開発の決定権を付与するかを見ている。これは、校本課程開発が成功できるか、全校に広げられるかどうかにかかわる」⁽²⁶⁾。このように、校本課程開発の成功は、校長が課程主任の仕事を支持し、カリキュラム開発の権限を主任に付与することと関係を持っている。筆者は香港のA小学校の校長にインタビューを実施したところ、彼はこのように語った。

「私は主任の仕事を支持します。私は行政と資源の面の責任者です。一般の小学校では校長以外に二人の副校長がいます。一人は児童生徒の学習を担当し、もう一人は道徳、生徒指導、生徒支援を担当します。カリキュラム開発に関する仕事は課程主任が専門家でトップです。私は主任の決定を尊重します。新しい校本課程を開発する際、主任は私の意見を求めますが、最後の決定は課程主任が行います。」⁽²⁷⁾

課程主任は校長に協力して、カリキュラムの専門家として、学校でのカリキュラム改革を推進する役割を果たす。この職はカリキュラムのデザイン、教授・学習の内容及方法の改善、教師の専門性向上を図るために、リーダーシップを発揮し、校本課程開発の学校組織を活性化させる。また、A小学校のカリキュラム検討会のメンバー（英語主任）は、次のように語った。

「校内では毎週月曜日7:40-9:15にカリキュラム検討会を行い、課程主任が私たちに新しい理論とか、他の学校の新しい取り組みとか、外の世界の知識と変化を教えてください。私たち教師はとても忙しくて、新しい理論を知らないです。課程主任がこの会議で紹介してから、みんなで討論し、本校も新しい理論を利用するという結論が出たら、すぐ実施の計画を立てます。」⁽²⁸⁾

「課程主任は、各教科と領域が目標に沿って進められているかどうかをチェックします。彼女がアイデアと理論を提示しますが、その後、各教科と領域が各自やります。もちろん方法は違います。例えば、国語がある学習アプリを用いて、成果を挙げた場合には、成功談も失敗談も含めて、教師全体が共有します。」⁽²⁹⁾

このように、課程主任の役割は、研修などを通じて、情報を収集しながら、カリキュラム開発の専門知識を学び続けて、最新の理論と方法を学校に持ち込むことである。また、学校のカリキュラム改革の方向性を把握し、各教科と領域が目標に沿って進んでいるかどうかをチェックし、全体の視野で教師を反省と改善させる役割も果たしている。カリキュラム検討会のメンバー（国語主任）は、このように語った。

「校長が推進したいことに関しては、課程主任が私たちに意見を求めます。教科主任たちはいくつかの問題点を示し、解決方法を考案します。しかし、みんなが実行時期としては適切ではない、まだ早いと結論を出したら、課程主任が校長にその結果を報告し、計画を中止します。」⁽³⁰⁾

課程主任は教師の意見を収集し、カリキュラム開発の意思決定の形態をボトムアップに変えて、校長と一般の教職員の間の意思疎通を図っている。また、教師の協働性・自主性を促進し、「チーム学校」を形成し、カリキュラムの変革を促進している。

4. 結論

本稿では、香港の校本課程開発政策の特徴を考察したうえで、課程主任という職を設置した経緯と役割を明らかにしてきた。ここでは、結論として以下の三点にまとめる。

第一に、香港教育局は知識偏重から「学び方を学ぶ」という教育理念への転換を実現するために、全力で校本課程開発を推進してきた。教育局は、カリキュラム改革の原動力が各学校の校本課程開発の実践にあることを強調し、香港のカリキュラム改革の短期・中期・長期発展計画を立てた。この計画からも分かるように、校本課程開発は香港のカリキュラム改革の主軸であった。また、校本課程開発は教師の専門性向上（専門知識、教職に対する態度と情熱、自主性）、学校組織機能の活性化（カリキュラムリーダーシップの向上、教師の協働性を促進し、学校の特色を生かす）とも相互に関係していることが明らかになった。

第二に、香港教育局は校本課程開発を支援するために多額の補助金を投入し、基金を設立したうえで、様々な支援制度を制定している。組織面では、教育局で校本支援行政組織を設けた後、小学校と中学校の支援が細分化されて校

本課程開発を大いに発展させた。制度面では、教育局は学校現場への専門的な校本課程開発の指導という支援制度を設けて、校外から定期的に専門家と教育局の校本課程発展処の人員を派遣している。また、主要な学習領域で成果を挙げている学校を「専門性発展学校」に指定している。さらに、「学校支援教師ペア計画」を推進している。

第三に、本稿では、公文書で記して内容を明らかにしたうえで、香港のA小学校の校長と校内カリキュラム検討会のメンバーに対するインタビュー内容の分析を通じて、課程主任の役割をより明確にした。その職務としては、校長に協力し、カリキュラム改革の理念と方針に従い、中央カリキュラム、学校ビジョン、児童生徒の学習ニーズに応じて、バランスを取りながら、学校全体のカリキュラム開発を計画する。また、校長を助け、学校の評価活動を計画、実施、推進する。さらに、教師の専門性向上、共同授業準備、人的・物的資源の活用などの活動を通して、教師の教育内容と方法、評価活動の改善を促している。校長が課程主任の仕事を支持し、カリキュラム開発の権限を主任に付与することが重要であることも明らかにした。インタビュー調査により解明された役割としては、課程主任は研修などを通じて、他の学校の情報を収集し、カリキュラム開発の専門知識を学び続けて、カリキュラムの専門家として、カリキュラム開発に関する意思決定をする。また、学校のカリキュラム改革の方向性を把握し、各教科と領域が目標に沿って進んでいるかどうかをチェックする役割も果たしている。最後に、課程主任は教師の意見を収集し、カリキュラム開発の意思決定の形態をボトムアップに変えたことも明らかにした。

本稿は、政策および制度的側面から、香港の「学校に基礎を置くカリキュラム開発」の特徴を探ってきた。校本課程開発の特徴を解明するために、各学校でのカリキュラム開発のリード役としての課程主任の職務内容を具体的に分析した。カリキュラム改革は中央レベルと学校レベル、教室レベルとの乖離が生じて、失敗に終わることが多々ある。しかしながら、香港のカリキュラム改革は教室の教育内容・方法、カリキュラム開発の改善だけではなく、教師の意識、学校文化等という隠れたカリキュラムまで改革の理念が浸透していて、浸透型カリキュラム改革ともいえるだろう。今後の課題としては、課程主任がどのように学校全体のカリキュラム計画を立てたか、また、評価のリーダーとして、どのような評価活動を行い、カリキュラムを改善しているかを分析することである。

[注]

- (1) 文部省『カリキュラム開発の課題（カリキュラム開発に関する国際セミナー報告書）』1975年、15-27頁。
- (2) 文部科学省ホームページ
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm (2017/7/8最終確認)。OECDのPISAでの調査データによれば、2003年、2006年、2009年、2012年、2015年の「読解力」の順位は10位－3位－4位－2位－2位で、「数学的リテラシー」の順位は1位－3位－3位－3位－2位で、「科学的リテラシー」の順位は3位－2位－3位－2位－8位であった。
- (3) 香港教育統籌委員会『生涯学習 全人発展：香港教育制度改革建議』2000年9月。
- (4) 経済協力開発機構（OECD）編著 渡辺良監訳『PISAから見るできる国・頑張る国2』2012年、明石書店、228-229頁。
- (5) 楊思賢 林徳成 梁偉倫 羅耀珍『課程改革と創新』2013年、香港大学出版社、64頁。
- (6) 顔明仁『戦後香港教育』教育リーダーと変革シリーズ、Division出版、2010年、55頁、272頁。
- (7) 香港教育課程發展議會『基礎教育課程ガイドライン－各尽所能・發揮所長』2002年、13頁、63頁。
- (8) 冯施钰珩編「香港の校本課程設計」『課程理論と設計』香港保良局教育検討会、1994年、137-141頁。
- (9) 香港教育課程發展議會『学習を学ぶ：教育課程發展方向』2001年、摘要ii、iii。
<http://www.edb.gov.hk/tc/curriculum-development/cs-curriculum-doc-report> (2017/7/8最終確認)。
- (10) 香港教育局ホームページ
<http://www.edb.gov.hk/tc/edu-system/primary-secondary/applicable-to-primary-secondary/sbss/school-based-curriculum-secondary/principle/definition.html> (2017/7/8最終確認)。
- (11) 香港教育統籌委員会『教育改革進展報告（三）』香港政府物流サービス署、2004年、10頁。
- (12) 教育局校本支援処小学校校本課程發展組
<http://www.edb.gov.hk/tc/edu-system/primary-secondary/applicable-to-primary-secondary/sbss/school-based-curriculum-primary/>
 教育局校本支援処中学校校本課程發展組
<http://www.edb.gov.hk/tc/edu-system/primary-secondary/applicable-to-primary-secondary/sbss/school-based-curriculum-secondary/contact-us.html> (2017/5/20最終確認)。
- (13) 香港教育局『校本支援服務（2013－2014年）小学校、中学校および特殊教育』2013年4月9日教育局通函（第33/2013号）。
- (14) 李偉成 余慧明 許景輝『カリキュラムリーダーシップと学校發展』学術専門図書センター、2008年、4頁。

- (15) 香港教育課程發展議會『基礎教育課程指針－焦点化・深化・持続－』2014年，10頁。
「全方位学習」とは，児童生徒が実際の環境の中で学習することを強調し，教室での学習では習得できない知識や，資質・能力を育てるためである。教室での知識の獲得だけではなく，教室から出て多様な経験をさせるためである。
- (16) 同上公文書，11頁。
- (17) 関之英「香港小学校国語教師に対する校本課程開発の調査研究」『教育曙光』第59巻 第1期，2011年，66-78頁。
- (18) 霍秉坤「香港小学校課程統籌主任の専門性発展：ニーズに応じた設計」『教育曙光』第52期，2005年，23頁。
- (19) 同上書，24頁。
- (20) 香港行政長官董建華『2001年施政報告』香港政府印務局 2001年。
- (21) 香港教育統籌局「教師の仕事を軽減する措置に関する」教育統籌局通知第4/2006号。
- (22) 香港教育統籌局「2004年小学校課程主任を設置し学校のカリキュラム開発をリードする職務」教育統籌局通知第1/2004号。
- (23) 陳健生 甘国臻 霍秉坤「教師レベルから課程の軟と硬政策を見る」朱嘉臻 張善培編『課程決定』香港中文大学教育学院，2008年，237頁。
- (24) 李偉成「課程領導の任務と要求」李偉成 余慧明 許景輝『課程領導與学校發展』香港課程發展と領導專業学会，2008年，學術專業図書，27-40頁。
- (25) 香港教育統籌局「今後五年のカリキュラム開発をリードするために小学校で課程統籌主任を設置する計画」教育統籌局通知第9/2003号，2003年，1頁。
- (26) 羅耀珍「香港小学校の課程リーダーの探究」羅耀珍 容萬城編2008『学校の課程改革と教師の専門性発展』港澳兒童教育國際協會，155頁。
- (27) 2017年5月24日に筆者が実施したA小学校の校長のインタビューの記録内容による。
- (28) 2017年5月24日に筆者が実施したA小学校のカリキュラム検討会のメンバー（英語主任）のインタビューの記録内容による。
- (29) 同上インタビューの内容。
- (30) 2017年5月24日に筆者が実施したA小学校のカリキュラム検討会のメンバー（国語主任）のインタビューの記録内容による。

付記：本稿はJSPS科学研究費補助金（若手研究（B）15K17340）の助成を受けたものである。

A Study of the features of School-Based Curriculum Development in Hong Kong primary schools: Focusing on functions of curriculum coordinators

Yuki NOZAWA*

ABSTRACT

This paper outlines School-Based Curriculum Development (SBCD) in Hong Kong from a policy perspective as well as from an organizational approach. To deepen our understanding of SBCD, in particular, how it is implemented and developed, I have chosen to focus on curriculum coordinators, and their functions and responsibilities. Curriculum reforms in Hong Kong are not done so transparently, and policies undocumented on paper. The model of implementation as I have observed through interviews and documentary analysis is a deep approach. The innovations are strong in curriculum contents, methods and materials. The innovations also affect the school and teacher cultures. This observation can be seen as one of the many successes of curriculum reforms in Hong Kong. One research area for future is how curriculum coordinators plan, review, design and assess curriculum innovations for curriculum improvements.

First, the Education Bureau in Hong Kong has used SBCD as a policy to transform the changes of the educational goals from achievements towards understanding and acquisition of learning skills. Second, to support SBCD initiatives, the Hong Kong government has invested substantially to establish special funding sources for schools. Third, this paper will give detailed descriptions about the functions and responsibilities of curriculum coordinators.

* School Education